

お薬のしおり

No.237 (2022.3)

東京医科大学病院 薬剤部

監修 東京医科大学病院 皮膚科

アトピー性皮膚炎と治療薬について

アトピー性皮膚炎せいひびふえんは良くなったり悪くなったりを何回も繰り返すかゆみのある湿疹を主とする疾患です。近年新しいアトピー性皮膚炎の治療薬が登場し、今までコントロールできなかった皮膚をきれいにすることができます。現在使われている治療薬について紹介します。薬物治療では皮膚の症状に合わせて、ステロイドや免疫抑制薬めんえきよくせいやくの外用剤、かゆみのある際にはかゆみ止めとして抗アレルギー薬の内服薬、症状が重い場合にはステロイドや免疫抑制薬の内服薬などを用います。最近ではアトピーに関連する免疫システムにピンポイントに作用する注射薬や細胞内の免疫反応かじょう かつせい かの過剰な活性化を抑制する内服薬があります。



●**ステロイド外用剤**：副腎ふくじんという臓器ぞうきで作られるホルモンで、このホルモンのもつ作用を薬として応用したものがステロイド剤です。炎症を起こす物質の産生を抑え、炎症反応を引き起こす細胞の増殖を抑える働きがあります。ステロイド外用薬は炎症を抑える強さは5段階に分類され、症状が重いほど強いステロイド外用薬を使います。一回に適切な量を外用することが大切です。詳細は皮膚科外来で指導いたします。

●**タクロリムス**：体の過剰な免疫反応を抑制することによって、かゆみや炎症を抑える働きがあります。ステロイド剤ではないため、副作用が少ないことが特徴です。

・**プロトピック軟膏 0.1%、小児用 0.03% 等**：1日2回までの使用で、顔面・頸部の皮疹に対して高い効果があると言われています。使い始めには刺激感（ヒリヒリ感、ほてりなど）がよくみられますが、通常は皮膚症状の改善と共におさまっていきます。紫外線は、通勤、通学や買い物など日常生活での外出は通常通り行っても大丈夫です。

●**抗アレルギー薬**：アトピー性皮膚炎の主な自覚症状である痒みに対する効果があり、補助療法として用いられます。医薬品の種類により、眠気や倦怠感が起きることがあります。

・ルパフィン錠、ピラノア錠、デザレックス錠 等

●**シクロスポリン**：重症アトピー性皮膚炎に対して用いられる、免疫抑制薬の内服薬です。強い痒みを止める効果があります。腎機能をみながら使用します。・ネオオラルカプセル（シクロスポリン）

●**生物学的製剤**：炎症の活性化を抑える抗体製剤です。

・デュピクセント皮下注 300mg シリンジ（デュピルマブ）：2週間に1回のペースで皮下注射を行います。在宅自己注射をすることが認められています。

●**ジャック JAK阻害薬**：細胞内で伝達を抑え、かゆみや炎症を抑えます。

・コレクチム軟膏 0.5%、0.25%（デルゴシチニブ）：成人・小児（2歳以上）の場合1日2回使用します。やさしい薬ですので、たっぷりと外用することが大切です。副作用としてニキビがおきることがあります。外用方法は皮膚科外来で指導いたします。

・オルミエント錠（バリシチニブ）、サイバインコ（アブロシチニブ）、リンヴォック錠（ウパダシチニブ）：1日1回内服します。リンヴォック錠とサイバインコ錠は12歳以上の小児にも使用することができます。この薬は、痒みと皮疹に対して効果は早いです。

薬物治療以外にも、アトピー性皮膚炎の治療の基本はスキンケアです。悪化の原因の対処も重要です。特に、汗を流すことを心がけることが大切です。しかし、ナイロンタオルでゴシゴシ洗う事はやめましょう。お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には、医師又は薬剤師までご相談ください。